

J. W. ガードナーにおける社会哲学と教育 の問題 ——優秀性と平等の理念の調和をめぐる——

讃 岐 和 家

1 序

ヘーゲルは『歴史哲学講義』において、「世界史は自由の意識における進歩である⁽¹⁾」という極めて意味深い言葉を述べたが、自由の意識の根底にあるものは人間の人格の無限の尊厳と価値の意識であるから、われわれは上記の言葉を少しく言い換えて「世界史は人間の尊厳と価値の意識における進歩である」ということができるであろう。しかしこのようにいう場合、人格の尊厳と価値の意識は現実には完全な状態において既に承認されてしまっているわけではない。歴史の進展において人格の尊厳と価値はあるときは著しく拡大され、承認されたが、それらが著しく制約され、ときとしては完全に無視されたときも多々存在したことは事実である。その意味において、歴史は不断の逆行で満ち満ちているとも言うことができる。現代にあっても、多くの場面においては人格の尊厳と価値は普ねく平等に承認されてはいるが、それらが抑圧されている場面も少なしとはしないことは指摘するまでもない。そのような現実にも拘らず、人格の尊厳と価値はあくまでも承認されなければならない人類の理念であり、たえずつきまとうそれらを否定しようとする諸々の力に抗して、その理念を守ることは人間にとっての不断の課題である。

このような理念の下に生きる人間の本性をその個人に即して考察するならば、その本性についてはこれを規定する際の視点に応じて多様な規定が

なされている。ロバート・ウーリッヒは『人間の職分』において人間の一般的な特徴として社会的動物, 道具をつくるもの, 象徴をつくるもの等々14のものをあげ, それらを貫ぬく本性として「自己超越的な本性」のあることを指摘している⁽²⁾。「人間はその継続的な自己超越的な本性においてのみ理解されうる⁽³⁾。」彼はこの自己超越のいとなみは, 自然, 精神, および全体者 *the Whole* に参与することを通じて実現されると理解している。この場合, 彼の思想の背景となっているものは, 万物をつつみつつ(したがって人間のうちに内在しつつ), 同時にまた万物を超越する超越者が存在し, 人間はそれへの参与 *partaking in* のうちに存在する, という形而上学的理解である。このような人間の本性の把握は極めて妥当なものといえよう。

まことに, 人間は常に何らかの意味での超越的存在者からの参与の呼びかけに応答しつつ, 不断の自己超越を求めるといふ本性と課題とをもっている。しかしこの場合見落してならないことは, このような超越者への参与と自己超越のいとなみが実現されるのは, 諸々の歴史的規定を具えた現実的な人間の共同体, すなわち現実的な社会という場においてである, という事実である。この関連においては, 現実の社会も常に超越的存在者への参与をめざし自己超越を求めるといふ本性と課題をもっている。個人および人間の共同体に共通するこのような本性と課題は, 超越者そのものの本性にもとづくものと理解すべきであろう。個々の人間は, 現実社会のうちにありつつ, 超越者からの呼びかけにこたえる限りにおいては現実社会から離脱し, ついで超越者への参与を実現するに際しては再び現実社会に還帰することを求める。現実社会は何らかの仕方で超越者からの呼びかけをこの社会のうちの個人に伝え, もって超越者への参与をめざした自己超越を求めるといふのである。人間個人の尊厳と価値はこのような仕方で超越者への参与において基礎づけられていると理解することができよう。個人と社会とのこのようなあり方は社会の問題一般を考えるに当たっての基盤をなすものであり, 教育の問題を考察するに当たってもこれを看過することはで

きない。

教育という概念は、これを規定する人の視点によって、被教育者の人格の開発、文化の伝達等々と多様に規定されてきている。たしかに、教育は犯し難い尊厳と価値をもつ人間各個人のあり方への配慮ではあるが、しかし他面において、より包括的に言うならば、その配慮は上述のような社会内の存在としての個人への社会の配慮である。その意味において、教育は一般的に規定するならば、社会がより大いなる発展を目的として行う未成熟な社会成員（被教育者）の社会化の作用とすることができる。この場合の社会化作用という概念の中には、現存の社会の諸慣習、信仰、価値観等等への同化に加えて、より広範な文化の体系一般への同化を含んでいることは言うまでもない。問題は、それら現存の社会的文化的体系への同化を行う場合でさえ、実際に意図されているものは、現存の諸体系が意識的もしくは無意識に内含している理想としての社会との関連において教育が行われている、ということである。デューイが教育をもって、有機体における新陳代謝の現象が人間集団に適用されたもの⁽⁴⁾、あるいは「社会の改良と進歩の重要な手段」⁽⁵⁾と規定していることもこのような事情をよく物語る一例であろう。いずれにせよ、教育はそれぞれの社会が、一定の歴史的状況の限定をうけつつ、その描き出した理想を仰ぎみて、この理想の実現をめざして行う価値志向的活動すなわち社会の自己超越のひとつである。

さて、現代社会が理想としてかかげる社会が一般的に民主主義社会と表現されていることは言うをまたない。この民主主義社会の基盤をなすものも各個人の人格が無限の尊厳をもつという理念であるが、この理念実現への志向は史上最高の度に強められている。この理念にもとづいてさらに、各個々人の自由の承認および各個々人間の平等という相対立する二つの理念が存在している。現代社会がより大いなる発展を求めて教育の問題を考えるとき、この二つの理念の調和は極めて重大な意味をもつようになる。なぜなら、各人の自由は各人が各々の独自の才能、能力、業績等の完全な発揮の追求、すなわち各人の独自のよさ、すなわち優秀性の追求という結

果を生み出すこととなるであろうが、このことは社会における各個人間の平等と相容れ難いことであるから。現代の日本社会における例をあげるならば、上記の理念は教育との関連においては日本国憲法第26条第1項、教育基本法第3条第1項に表明されている。ここに表現されている「能力に応じて、ひとしく教育を受ける権利」、「ひとしく、その能力に応ずる教育を受ける機会を与えられなければならないもの」という規定も上記二つの理念の調和の問題を内に含んでいるといえよう。このような意味において、社会の発展、各個々人の独自性および優秀性の追求、および各個々人間の尊厳と価値の平等の実現という三つの理念の調和は、現代社会の教育にとって最も重要な課題のひとつとなっているのである。

J.W. ガードナー John W. Gardner は『優秀性——われわれは平等であるとともに優秀でもありうるか』(1961年) *Excellence. Can We be Equal and Excellent too?* においてアメリカ社会の状況との関連でこの課題と取り組み、興味深い考察をしている。この小論においては、この書物に展開されている彼の論議を検討し、上記課題について考察するよすがのひとつとしたい。以下においてはまず彼の所論の要約をし、ついで彼の思想の社会的背景、社会哲学、および個人と教育の問題の順にみてゆくこととする。

ガードナーはカリフォルニア州の生れで、スタンフォード大学で心理学を専攻し、ついでカリフォルニア大学大学院に学び、1938年に哲学博士の学位を受けた人である。その後コネティカット大学およびマウント・ホリヨーク大学で心理学を講義し、第二次大戦中は軍務に服したが、戦争終結後は1946年にカーネギー財団に奉職し、1955年以後は同財団、およびカーネギー教育振興財団の理事長をつとめた。1965年8月ジョンソン大統領に請われて、連邦政府の保健・教育・厚生省長官となり、1968年2月までその職にあったことは周知のことであろう。上記の他に幾つかの団体、会社、委員会の仕事を兼任して来ているが、そのうち教育問題との関連において

著名なものは、ロックフェラー兄弟基金の後援による教育問題懇談会の議長をつとめ、『優秀性の追求，教育とアメリカの将来』（1958年）*Pursuit of Excellence. Education and the Future of America* と題する報告書を発表したこと，およびコロンビア大学付属のアメリカン・アセンブリーが発表した大統領への報告書『アメリカ人の目標』（1960年）*The Goals for Americans* の中の第3章「教育に関する国家目標」をまとめたことであろう。発表された著作には，上記『優秀性』の他に，『自己更新一個人と自己革新的社会』（1963年）*Self-Renewal. The Individual and the Innovative Society* がある。ガードナーは，彼の学歴および職歴が示すように必ずしも専門の哲学者でも教育学者でもない。専攻分野からいえばむしろ心理学者であり，学者というよりはむしろ実務家である。しかし，それだけに，1950年代以降におけるアメリカ社会が直面した教育問題に対して極めて現実的な解決策を提示しているように思われる⁽⁶⁾。

II 『優秀性』の問題と論旨

ガードナーが『優秀性』において取り上げている問題は，その副題が集約的に表現しているように，自由な民主社会における個人間の平等と，各個人の優秀性の追求とをどのようにして調和させるかという問題である。彼はこの二つの理念の調和を基礎として，アメリカ社会そのものの優秀性の追求，すなわちその社会のより大きな発展の可能性をも問題とするのである。本書の序文において彼はその問題を次のように記している。「この書物は優秀性，より限定して言ってわれわれの社会と同じような社会において *in our kind of society* 優秀性が可能となる条件についての書物である。しかしそれはまた必然的に，平等についての書物である⁽⁷⁾。」より具体的な本書の問題として彼が取り上げるものは，各個人が優秀性を追求するに際して，民主主義社会が直面する諸々の困難とその解決策，民主主義社会においてわれわれが求める平等の様相と度合い，優秀な人間の存在をわれわれはどの程度まで許容できるのか，高等教育の過剰の問題，知

的エリートによる社会の支配の問題，その他である。序論に続く本書の15章からなる本文において，彼はこれらの諸問題を論じている。

本論の15章は4部に分けられており，第一部「平等と不平等」は社会一般の規則原理を取り扱う。ついで第二部「才能」は進路分化の過程としてのテストの問題，第三部「個人間の差異」は個人の自己実現という理念を基盤とした優秀性と平等の調和，第四部「解決に際しての留意事項」は現下のアメリカ社会の課題との関連でこの理想実現の諸要件を提示している。論旨は大要以下のごとくである。

1. 人間の社会的生活を規制する原則，乃至社会秩序には三つのものがある。第一は世襲的特権 *hereditary privilege* によるもの，第二は平等主義 *equalitarianism* によるもの，第三は個々人の自由な競争にもとづく業績における競争主義 *competitive performance* によるものである。世襲的特権の原則は人類の歴史のはじめから存在し，今なお現代社会の各層に根強く存続している。しかし，人間各個人の価値を世襲の財産，権力，地位等により人為的に差別する行き方は近代ことに16世紀以降における新しい宗教意識，民主主義思想，および産業革命の出現とともに，社会における支配的原理としての力を失った。その後に来たものが，他の二つの原則，すなわち個人の能力および業績の差異を可能な限り縮めようとする平等主義の原則と，これと反対に，個人の能力，業績の差異を是認し，その意味で優者の勝利を是認する競争主義とであった。

この二つの原則は，穏和な形にとどまっている限りは共に社会にとって欠くことのできないものであるが，過激な形をとるようになると，どちらの原則も社会にとって有害となる。アメリカ社会について言えば，それは世襲的な特権にもとづく「階層化された社会」*stratified society* への批判から生れたのであるが，その結果として一方においては平等主義の原則が開拓者達の社会を基盤として発生した。このような状況から，あまねく受け入れられている「機会の均等」という概念が由来しているのである。

この原則が最低賃金法、累進所得税等の諸々の良い制度を生み出してきた。しかしながら、平等主義が行きすぎて極端な形をとるようになった場合、個々人の能力や業績の差異は無視されるようになり、社会の固定化、沈滞がもたらされる。他方、各人は自分の努力の当然の結果として得られる地位や力を享受することが許さるべきである、という考え方も多数のアメリカ人によって受け入れられている。殆んど無一物の状態から身を起して、産をなし、あるいは高い地位を得た人々、例えばフランクリン、カーネギー、リンカーン等が屢々国民の理想と仰がれる所以はここにある。

世襲的特権による人間の序列の決定、平等主義、および業績面での競争主義の社会を規制する三つの原則は一般的に言って一つの社会のなかに共存しているものである。共存しながら、それらは互いに拮抗し合っている。そして、三者のうちどれか一つの原則が支配的となると、それにとともなる諸々の弊害が醸し出されて来て、他の原則から批判、攻撃されることとなり、その原則は衰退してゆくこととなる。すなわち、世襲的特権の原則が支配的となると、その社会のヴァイタリティは低下し、種々の汚職、腐敗が起り、個々人の独創性は著しく抑制される。平等主義が支配的となった場合、凡庸主義が世にはびこり、同様に社会の活気は失われる。凡庸主義の極みにおいては往々にして人々が強力な独裁者の現われるのを待ち望んだり、才能ある個人の優秀性の追求を賞讃する場合も出て来るのである。苛責のない競争主義は、とどまるところを知らない弱肉強食の状態を生み出す。このような状態にあっては人々は不断の脅威にさらされることとなり、最も強い者でさえこのような脅威からの避難所を逆の立場である平等主義等に求めることとなる。

アメリカ社会において、これら三原則は個人の業績の強調（競争主義の立場）およびその抑制（平等主義と世襲による階層化の立場）の二つに分化される。民主主義社会はこの二つの立場を共に認め、決して解消されることのない緊張関係において維持しなければならない。

2. 人類は長期間にわたって人々がもっている才能 talent の大多数を埋

もれたままにおいて浪費してきたが、今日われわれは人々の才能を探し求め、それらの効果的な活用を迫られている。その理由は、社会機構が巨大になり、社会生活が極めて複雑多様になったこと、および科学・技術の急速な進歩を基盤として社会生活が高度の発展をとげたこととである。このような仕方で発展した現代社会は、一方では高度の知識技能を具えた人々（ハイ・タレント・マンパワー）を必要とするとともに、他方では基礎的な能力（読み書き等）と事物に対する適確な判断力を具えた人々を社会全体のために必要としている。才能の探求は、才能を識別することと、青少年を各々の才能に応じて選別 *sort out* し、彼等を育成してゆくこと、すなわち教育の過程とを通じて行われる。

才能の識別の重要な手段をなすものはテストである。今日テストは人間の評価を単なる数値により機械的に決定してしまいがちであることへの人々の恐れ、テストによる社会統制が出現する可能性への人々の恐れ、テストそのものが絶対的かつ普遍的に完全ではないこと等の理由で、甚だ不人気である。しかし幾つかの欠陥と限界をもちながらも、テストは今日では他のどんな方法よりも信頼しうる才能識別のための手段である。知的能力のみを測定するものである、等々のテストの特性と限界を念頭におきながら適切な仕方でそれを用いることが必要であろう。また、一般的に言って、才能に関しては数多くの俗説や幻想が存在するが、それらを打破して、才能というものの真実の姿に関する科学的な理解に立つことが必要である。

才能の選別、および育成の過程としての教育について考える場合、人々は往々平等主義の基盤にたって、可能な限り平等な教育を求める。しかしこの場合、人々は凡庸主義に陥らないよう注意しなければならない。民主主義は、人々に各人は己れのうちにある最も善いものを実現すべきである、と勧める。したがって、民主主義はわれわれがすべての青少年に対して、当人にとって益となる各人各様の教育を与えることを要請するのである。高等教育に関しても、「すべてのものに等しい教育を」というスローガン

にもとづいて大学教育を可能な限り多くのものに提供せよとの要求があるが、大学教育はそれにかんがった能力をもつ人々のための教育の場として理解されるべきである。「人間の尊厳と価値は各人が達成し得る精神的資質との関連においてのみ評価されなければならない。」大学教育に適合していない若者には、大学以外に彼に向いた勉学の道が多数存在するのである。

3. 上記のような事柄を背景として自由な民主主義社会における平等の実現と優秀性の実現を可能にするために留意されなければならない点は次のようなものである。第一は、民主主義社会における指導性 leadership の意義とその役割を認識することである。民主主義社会にあって力あるものは、それぞれの才能乃至力に応じて社会的責任を果すことが期待されている。この場合、民主的社会が多様に分化した分野から成り立っているものであるがゆえに、指導者も各分野毎に多数存在することとなる。このような事情に応じて第二に、優秀性の観念も多元的であり、多種多様な優秀性が存在することとなる。優秀性は、各人が己れの本来的自己を最善のすがたにおいて実現することを通じて社会全体の価値の高揚に貢献することのうち存在するのである。第三に、優秀性の追求を要請するものは、自由な社会の存立ならびに発展の追求というアメリカ国民の課題である。自由な社会の理念が挑戦を受けている今日、この国民にとっての命法は「汝もし自由なる社会を信ずるならば、それにふさわしくあれ」である。最後に、アメリカ国民のこのような理想は、より具体的には「偉大な社会」の建設という自らが自らに課した規準 **standard** として表現される。この規準が優秀性の追求を要請するのである。

III ガードナーの思想の社会的背景

ガードナーの思想は、上記『優秀性』の要約からも明らかであるように、現代のアメリカ社会の重要な問題のひとつである個々人の優秀性の追求については社会そのものの優秀性の追求を、万人の平等という民主主義社会の基本原則を損うことなく、どのようにして達成しうるかを問題とするもの

である。1963年の『自己更新』においては、彼は「巨大な機構に発展した現代社会の諸組織が、どのようにして没落に向う傾向から脱却しうるか、所詮は脱却し得ないとした場合、どのようにして没落に向う歩みの速度をおとすことができるか」という問題を取りあげているが、ここでの問題意識も『優秀性』における場合と略同様であると言えよう。

『優秀性』にみられるガードナーの思想とその主要な論点は一見極めて常識的であると言えるであろう。しかし、彼がそれらの諸点を指摘した現代アメリカ社会の状況に照してそれらの論点を考えてみると、そこには社会の行き方における基調の変化に呼応した新しい主張とも言うべきものが見られるのであって、その意味において彼の思想と主張は極めて大きな意味をもっているように思われる。教育の問題との関連において、彼の思想と主張の背景となっているアメリカ社会の状況についてよく描いているのは、進歩主義教育の歴史を克明に分析し記述したローレンス・A・クレミンの『学校の変容——アメリカ教育における進歩主義1876—1957』（1961年）であると思われるので、ここで彼の指摘することを手引きとして上記の状況を考察してみることにしたい⁽⁸⁾。

クレミンはこの書の序文において、進歩主義教育の本質および意味合いを指摘した後、本文において、進歩主義教育運動の誕生、その発展の諸様相、および第二次大戦後における急速な衰退と1950年代末におけるその運動の没落を記している。この小論の問題との関連において重要なのは、序文、および第二次大戦後、ことに1950年代における状況について書いている第9章であるから、これらの部分に焦点を合せて、彼の論ずるところを考察することとする。

クレミンがこの書物の序言で指摘するところによれば、進歩主義教育運動の本質は次のごとくである。「進歩主義教育の運動は、実際のところ、アメリカ的生活——人民による、人民の、人民のための統治——の諸理想を、19世紀後半に登場し、人々を戸惑わせるほどのものとなった都市的・工業的な新文明に適用しようとする広汎な人道的努力として始まったので

あった。進歩的という言葉が、この運動の本質、即ち大書されたアメリカ進歩主義 American Progressivism writ large の教育的側面であるという本質を理解する鍵を提供している。事実、進歩主義教育は、教育における進歩主義、すなわち個々人の生活を改善する多方面の努力として始まったのであった⁽⁹⁾。」このような本質をもつ進歩主義教育運動は、実際は個々別々に独立した意味合いをもつ幾つかの運動から成るものであったが、そのような運動の複合体としてそれがもった意味合いとして、彼は四つのもの、即ち教育内容を地域社会における実生活に近づけること、心理学等の科学的成果を教育に応用すること、児童の個人差に応じた教育を行うこと、すべての青少年に教育の機会を提供しようとしたことをあげている。

19世紀末における「新しい」工業化・都市化された社会的・文化的状況において誕生した進歩主義教育の運動は、今世紀前半に輝やかしくまた多彩な発展をとげた。しかし、1930年代後半に最盛期に達したこの運動は第二次大戦後急速に衰退し、1950年代末に突如として崩壊するに至った。『学校の変容』の第9章は第二次大戦後の進歩主義教育運動の推移と、この運動との関連において1950年代初めからアメリカ教育に加えられるようになった幾つかの主要な批判について述べた後に、この運動の崩壊の理由として以下の七つをあげている。1) 運動内部のグループ間の対立・紛争にもとづく運動そのものの歪曲、2) すべての改革運動につきものの性格であるが、否定的主張ばかりが強く、建設的プログラムの面が欠けたこと、3) 教師の側に多大な時間と能力を要求しすぎたこと、4) 運動そのものの成功により、無用のものとなった、すなわち「自らの成功の犠牲となった」こと、5) 戦後に社会が政治思想および社会思想において保守主義に復帰したこと、6) 運動が専門家のものとなり、一般人から浮き上がったこと、および7) この運動がアメリカ社会の不断の変容に歩調を合せて歩み得なかったこと。これらの理由のうち、クレミンが最も重要であるとしているのは第七の点であるが、この点に関連して彼が指摘している戦後の社会の変化の主なものは、移民の流入が絶えたこと、多数の人々の著作活動によ

り地域社会 **community** の概念が変ってきたこと、1890年代におけるゲマインシャフト的社会的追求に代って1950年代にはむしろ多元主義社会が求められるに至ったこと、かつては斥けられた個人主義が、非画一性 **non-conformity** を求めるものとして称讃されるに至ったこと、科学・技術の急速な進展にもとづく経済の進展、新しい情報の増大、マス・メディアの急速な発達と普及である⁽¹⁰⁾。

クレミンは、進歩主義教育の主たる推進母体となった進歩主義教育協会(1919年結成)の1955年における解散、およびその機関誌『進歩主義教育』の1957年における廃刊が、事実面における進歩主義教育運動の崩壊を意味すると理解しているのである。しかし彼は、このような事態のうちにあっても、進歩主義教育が取り組んだ問題が未だ解決しつくされたわけではなく、その理念は課題として残っている、と述べている。この点に関して次のような『学校の変容』の最後の一節は極めて意味深いものを含んでいる。

「進歩主義教育協会は解散し、進歩主義教育運動自身も厳しい再評価を必要としている。しかし、それらが学校の中に作り出した変容は数々の意味においてもとに戻し難いものである。そのことは、進歩主義教育を一部分とするより広大な工業上の変容をもとに戻しがたいのと同様である。教育上の飛躍と泥縄式教育改革について語る人々の論議の諸論点と対比するとき、真に進歩主義的なヴィジョンは、世紀半ばのアメリカが当面する諸問題に対して不可思議にも適切な意味をもっているのである。恐らく、それはただアメリカ人の生活と思想における改革の出現を基盤とした再公式化 **reformulation** と再生とのみを待ったのである⁽¹¹⁾。」

「大書されたアメリカ進歩主義」の教育における表現としての進歩主義教育運動に関するこのようなクレミンの叙述と分析ならびに評価は19世紀末から1950年代に至るまでのアメリカ社会一般の状況を極めて適切に反映しているといえよう。この運動を生み出すに至った社会の関心事は「工業化された文明」の諸問題であった。より正確に言えば、南北戦後、急速に進展することとなったアメリカ社会の工業化は、「苛責のない競争主義」

を基調として推進されてきた。その思想的基盤はウィリアム・グレアム・サムナーによって代表される「社会上のダーウィン主義」 The Social Darwinism である。19世紀末におけるこの社会の諸問題は一言で要約すれば、この時期の工業化の過程が生み出した人間疎外の状況である。進歩主義運動一般はこの問題に対処し、その克服の方策を提示するものであったのである。進歩主義教育が熱狂的に受け入れられ、支配的となった今世紀前半はこの問題の解決が進められ、一応の成功を収めた時期であった。ところで、この運動が「因習的な知恵 conventional wisdom に墮するに至った」とクレミンの言う1950年代⁽¹²⁾ はアメリカにおける工業的文明がいわばもうひとつの新しい段階に到来した時期と解することができよう。クレミンの指摘するところによれば、それは「多元主義の探究」の時代、「個人主義と非画一性として賞讃する時代」、科学・技術および経済の急速な進展の時代である。1950年代後期におけるアメリカ社会の出来事としてはなお国際関係に由来する国民意識の緊張、ことにロケット技術における遅れの認識に由来するそれが屢々指摘されるが、それらは国内社会における上記の変化の認識に比べれば第二義的なものとみなされるべきものといえよう。

III ガードナーの社会哲学

ガードナーの思想は必ずしも上述のようなアメリカ社会の状況を根源的また組織的に分析し、その分析との関連においてこのような歴史的社会的状況に対する対症的な療法ないし処方提示するものとはいえない。しかし少くとも彼の思想がこのような歴史的状況を考察の出発点としていることは、優秀性の冒頭で記している彼の思想の契機となった一つのエピソードと彼の関心事の記述から明らかである。この部分は次の如くである。

「1930年に上院議員ヒューイ・ロングは“人みなは国王である”と“富は共有とせよ”のスローガンでこの国の人民指導の新しい基準を樹立した。人々はユーモアたっぷりにこれらの句をもじって変り文句をつくり、流行

語とした。それゆえ、かつて若い教授であった私がある日教室の黒板でそれらの句をもじったものに出くわしたときにも少しも驚かなかった。学期末試験の日であったが、誰かが黒板に落書きをしていたのである。その文句は曰く、“人みなは学生である”，“成績は共有とせよ”。

それは全くの茶化しであった……。しかしこの二つの句は私の心にいつまでも残ることとなった。これらの言葉の裏にひそむものは幾つかの興味深い社会的な意味合いであった。これらの言葉のうちになりひびくものが1930年代の平等主義が教育の世界に反映したものであることを知るのは困難ではなかった。

この主題はその後の私をとらえて離さなかったのである⁽¹³⁾。」

ガードナーが上に述べた一つのエピソードの背後にあると感じた「幾つかの興味深い社会的意味合い」を分析してみるならば、そのなかに含まれる主要なものはおそらく次のようなものであろう。先ず第一に、社会においてすべての個人は等しく犯し難い尊厳を保有するものとして平等な取り扱いを受けることが保障されなければならない。しかしながら第二に、このことはすべての個々人が全く同一になることを意味するものであってはならず、各人は各々の独自性に従って行動する自由をもつことが社会において承認されるべきである。そして第三に、各々の個人が平等でありつつ同時にそれらの個々人が各々の独自性を発揮することが一つの社会において要請されている。このような事情はあらゆる社会とくに近代以降の民主主義的な社会における普遍的な理念であることは序において既に指摘した通りである。生き生きとした社会とは、その成員一人一人の独自性が完全に発揮されつくしているとともに、これらの各々一人一人がまた等しい価値を認められて、すべての人間が一つの統一性を実現しているような社会である。このような社会は、そのような仕方での各個人への分化と分化された各個人の統一を通じて、その社会の持続と発展とを求めるのである。社会の持続と発展を求める活動としての教育は、したがって先ず各々の個人の独自性を完全に発揮させることを求め、他面においてこれらの各

人との平等を実現し、もってこの社会全体の発展を計るものでなければならぬ。ガードナーの思想は社会ことに社会における教育のこのような課題の存在を先ず提示しているのであるが、この問題意識は妥当なものといえよう。

ガードナーは彼の問題を提示した後に、上記のような社会の理念実現の方策を考察している。その考察の内容をなすものは、社会についての考察と、社会のうちにある個人の問題についての考察とであるから、次ぎに彼の社会についての考察をみることにする。社会についての彼の考察を検討する場合、われわれが気付くことは、彼がそれを二つの側面において考察しているということである。第一の側面は、事実あるがままの社会すなわち現実社会に働く力に関する価値評価を抜きにした——実際には幾分かの価値観は混入しているのであるが——考察であり、第二の側面は社会における理念の考察である。

第一の側面から見て行けば、先きに見たように彼は社会を規制する三つの原理として世襲的特権、平等主義、および業績に関する競争主義をあげ、これら三つの原理の共存と競合を指摘している。しかし容易に理解されるように、特定の現実社会はその社会がおかれた歴史的状況によって規制されて、上記三原理のうちのいずれか一つが強調されている。この点に関連して、彼はそれぞれの原理が支配的となった場合の社会の例、およびそのような社会から生じる諸問題について説明するのである。これら三つの原理のうち世襲的特権の原理は、近代以降の社会にあっては既に力を失ったものであるから、彼の主たる関心は残る二つの原理が支配的となった場合の社会の状況に向けられている。平等主義が支配的となった社会の例およびそれらの社会に起る諸々の弊害については先きの要約等にも略明らからであるから、ここで詳細に説明することは省略することとする。

このような三つの原則はいずれの社会においても存在するものとしてガードナーは指摘しているのであるが、とくにアメリカ社会における人々の考え方としては、これらの三原則を、個人の業績を強調する考え方と、こ

れを抑制しようとする考え方との二つに分類し（この場合は、世襲的特権の原理と平等主義の原理が後者の考え方に入る）、これら二つの考え方が緊張関係を保ちつつ維持されるべきであるとして次のように言っている。

「われわれの社会において緊張をはらんでいる最も重要な境界線は、個人の業績の強調と、個人の業績の抑制との中間にあることは明白である。この緊張は決して解消されないであろうし、また解消されてはならない。この現実を受け入れなかったために、これまでの幾多の精神的な不消化や起らないでもよい騒動が起ったのである⁽¹⁴⁾。」

現実の社会に関するガードナーの分析において指摘されなければならないもうひとつの側面は、彼もまた現代社会の特徴が、社会の内実的な様相に即してみた場合、科学・技術の発展、および社会機構の巨大化と複雑化にある、と把握していることである。彼が至るところで言及しているこれらの特徴は普ねく知られていることであるから、ここで説明の要はないであろう。ただ彼が、科学・技術の発展、および社会機構の巨大化・複雑化は今もなお驚ろくべき速度で進展を続けており、その速度の大きさを強調していることは注目されるべき点であろう。このような社会にあって、社会の各層における才能の開発が急務とされる、と彼は説くのであるが、そのような関連において、彼は言う。「ハイ・タレント・マンパワーの要求は現代生活の特徴づける技術の領域における複雑さのレベル、および現代社会機構の複雑さに深く根ざしている。そしてこれらのいずれよりも重要なのは、技術の領域と社会〔生活〕の領域との両方における革新と変化の速度である⁽¹⁵⁾。」

社会の現実に関する上記のようなガードナーの考察のうちには既に社会の理念に関する彼の理解が含まれている。われわれは次に彼自身が述べているところに即して社会の理想に関する彼の思想をみてゆくこととしたい。この問題に関する彼の思想もまた幾つかの側面と契機とをもっているが、それらを包括的に示しているのは、『優秀性』の第14章「自由な人民の目標」のはじめの部分であろう。それは次のごとくである。

「何かを信じていない社会には決して優秀性はありません。アメリカ人は何を信じているのか。……われわれが論じてきた一つのことは、アメリカ人が個人、および個人の〔自己〕実現の重要性を確く信ずる、ということであった。われわれがアメリカ人としてわれわれの最も深い確信に忠実である限り、個人への関心はわれわれの意識の中心的な主題である。しかし個人への関心だけでは充分ではない。自由な人間は自分達の目標を二つの次元、すなわち個人の次元と社会の次元においてもたねばならない。個人の自己実現が広汎な規模で起るのは、ただ次ぎのような社会においてのみ、すなわち個人を大切に作る仕組み、個人を保護する力、個人を刺激し発展させる事物の豊富さと多様性、個人が人格としての自己を見出し、または見失うことができる価値観の体系をもつような社会においてだけである。……このような社会は自由な人間が自分達の社会の福祉に対して献身的に心を注ぐときにのみ生成し、存続する。この意味で、自由な人間のすべては自分のためにも生きるとともに彼の社会のためにも生きるのである。彼の目標は個人の〔自己〕実現であるばかりでなく、彼の社会を豊かにして強化することでもなければならぬ。賢明な人間は自由という衣は縫い目なし(シームレス)であるとみる。自由な社会は個人の〔自己〕実現の伝統が内部から崩壊するとき存続を止めるであろう。しかし、自由な社会が存続しないならば、自由な人間も存続しえない⁽¹⁶⁾。」

この箇所からも明らかであることは、ガードナーにとって、理想の社会にあっては、自由な人間の尊厳と価値が一方の基盤として存在し、他方において「自由な社会」の福祉と強化の目標が存在し、個人と社会の間に相互帰属的な関係が成り立つ、と理解されていることである。個人の尊厳とこれにもとづく個人の自己実現の理念については、次ぎの節で検討するのでここでは、彼が理想として考えている「自由な社会」についてみるならば、このような社会の内容については彼のあげる次のような例からほぼ理解することができよう。正義にもとづく平和、爆弾の脅威なき世界、法の支配、個人の尊厳と価値、各人が己れの最善を達成しうること、病気・無

知・貧困等の諸悪の克服，法の前の平等，機会の均等⁽¹⁷⁾。『自己更新』においても同様の意味で彼は次ぎのように言っている。「信仰という深みにおける意見の一致 **consensus** を強要することは堪え難いことであるといえよう。……多元主義的な社会は賢明にもその社会の意見の一致を諸々の深みの中間におくことを求める。われわれの場合，その次元で見出すものは，自由の理想，機会の均等，個人の価値と尊厳の観念，正義の理念，兄弟愛の夢である⁽¹⁸⁾。」

社会の理想に関連して，ガードナーの思想において意味深いことは，彼がアメリカ社会の理念を「偉大な社会」**a great society** という概念でより一層具体的に規定し，提示している点であろう。彼は言う。「自由な人間は自分自身の目標を設定しなければならない。他の何人も彼らに何をなすべきかを告げることはない。彼らはそれを自分自身でなさねばならないのである。……今日われわれの社会の弱点が，現時点における国際間の抗争との関連で指摘されている。しかしながらこのような抗争が生じて来る遙か以前からわれわれは自由な人間として，偉大な社会の建設という崇高な課題に身を献げたのであった，ただ強だけの社会でなく，豊かであるだけの社会でなくて，偉大な社会の，である。これはわれわれが自分達自身とかわした協定 **pact** である⁽¹⁹⁾。」彼の提示するこの「偉大な社会」の理念についても，彼が一般的に理想として言及している「自由な社会」と同様に，その内容ないしプランが包括的に展開されていないが，上記のような「自由な社会」の内容と同じ線上で理解されていることは明らかであろう。「偉大な社会」という理想の提示についてユニークな点は，むしろ，彼がまずこの理想を自由な人間達が自分達自身で自らに課した「規準」**standard**，「自分達のために設定した目標」「自分達と交した協定」との関連で提示している点，言葉を換えて言うならば，いわば下から盛り上げた理想として提示していることである。それとともにわれわれにとって興味深いもうひとつの点は，彼が現代アメリカ社会の理想を，このように具体的，かつ明確な言葉で表現された目標として——デューイの用語を借り

るならば「目視のうちにある目的」end in view として——提示したことにあるように思われる。(因みに、ガードナーの「偉大な社会」の建設の提示はジョンソン現アメリカ大統領が同じ表現 The Great Society のスローガンを掲げる以前になされたものである。)

以上の考察においてわれわれはガードナーの社会に関する理解を一応社会の現実および理想に分けて検討してきたが、より深い次元に立ってみる場合、二つの側面は密接に結びついているということができよう。この見地から極めて総合的な彼の社会哲学を要約してみる場合、われわれが見出すことは次の諸点である。まず第一に、彼は社会における個人の尊厳と価値を「中心的な主題」として理解する。と同時に、このような個人は自らの主体性にもとづき、社会の福祉を求めなければならない、という課題を負う。社会は個人の尊厳と価値を保証しつつ、個人の自己実現をも保証し、またそれをうながすものでもなければならない。この意味において、社会に働く二つの考え方、個人の業績の強調とその抑制は「決して解消されてはならない」緊張関係において維持されなければならない。この場合、この二つの考え方、より一般的には社会に働くいわゆる三つの原理の緊張関係が「決して解消されてはならない」とされる根拠は、個人および社会の発展ないし自己超越を可能とするために、であると理解することができよう。このことは三原理のいずれかが極端な形で支配的となるとき、個人および社会の活力が低下し、社会の沈滞・腐敗等をもたらされる、とする彼の思想からも明らかであろう。

社会そのものの自己超越についていえば、社会の理想は「偉大な社会」という概念として彼においては規定されているが、社会の理想は一国民の次元を超えて、超越的な存在者への参与が志向されるべきであるとわれわれには思われる。この側面に関するガードナーの思想は必ずしも十分に展開されてはいない。しかし彼が才能の開発に関して唯一の問いは「われわれは偉大な文明を創造するような多種多様な才能を開発しつつあるのか、

否か」である，としている箇所⁽²⁰⁾，「歴史を通して人間は，そのものとの関係においてのみ自分の生を意味あるものとみなしうる宇宙という概念に到達しようとする強い要求を示してきた⁽²¹⁾」と書いている箇所，その他からも，彼が何らかの超越者との関連において社会のあり方を理解していることは明らかである。

ガードナーの社会哲学がもつもうひとつの意義は，彼がとくに現代社会の状況の特徴として科学・技術の著しい発展と社会機構の巨大化・複雑化とを指摘している点であろう。平等主義と競争主義の調和の課題を彼が論ずる場合も彼の関心は実はこのような現代社会の状況から生ずる諸問題に向けられていたといえよう。平等主義の強く支配する社会での出来事の例として，彼が「二本以上のスプーンをもつものも貴族主義者とみなされていた」ゴールド・ラッシュ時代の金鉱地帯の一部落の出来事をあげる⁽²²⁾。競争主義の強く支配する社会の悲惨を説明するとき，彼は「社会的に全く無力な少女が夜も殆んど眠ることなく，ひとり暗闇の坑道で通風口を守った」19世紀半ばの英国社会の出来事を記している⁽²³⁾。これらは，それぞれに現代の大衆社会の状況，および都市その他における労働者等の境遇を念頭におき，考察されたものと見ることができよう。これらの諸状況のうち彼がどちらかと言えば重点をおいた点は，平等主義的な側面の批判であるが，このことはアメリカ進歩主義が到達した新しい局面に関わることも言うをまたないところであろう。ことにこの点については，キルケゴールが『現代の批判』において提示した現代社会への警告，「現代は極端な平等主義のゆえに人々はほんの僅かな卓越にも不安となる」を彼が引いていることは極めて意味深重である⁽²⁴⁾。

V 個人とその教育の問題

社会における個人の問題，殊に個人の教育の問題がガードナーにおいて考察されるのは，上に述べたような彼の社会哲学の枠組においてである。われわれの問題である「優秀性と平等の調和」の問題も，彼の個人とその

教育の問題に関する考察に深く関係している。個人とその問題に関する彼の考察もわれわれは二つの側面から検討することができよう。より適切にいうならば、それは二つの次元というべきであろうが、その第一は、社会が自らの発展、したがって個々人の優秀性の発揮を求めるに際して、個人を適切な仕方を選別しまた教育するという現実的な活動の考察である。第二のものは、このような社会の現実的な活動を可能とする根拠をなす各個人の本性についての考察、すなわち各々の個人はそれぞれに独自の本来的自己の実現を求める本性をもち、社会は個人の自己実現を助成する課題をもつとする考察である。

これらのうち第一の側面からみてゆくと、彼は先ずウィリアム・ジェームズの「一国民の偉大さはその国民がどれだけ多くの優れた人間をもつかに依存する」という言葉を手引きとして、急速な科学・技術および社会の生活の進展を特性とする現代社会における人々の才能の開発の急務を強調する。彼はいう。「実際のところわれわれは高度の能力と高度の訓練をもつ人々に対する社会の態度に革命が起っているのを眼のあたりにみている。史上はじめてこのような人々が非常な大々的な規模において切実に要求されているのである。幾多の時代を通じて人間の社会は常に人材を無駄にしてきた。今日われわれの社会における高度の社会的および技術的發展の結果として、われわれは人材の発掘と人材を効果的に用いることを強要されている。われわれの時代を特徴づける歴史上の変化のうちでこのことは、究局において最も根源的なものの一つとなるであろう⁽²⁵⁾。」このような状況において直接的に現れるのは「ハイ・タレント・マンパワー」への要求であり、その育成の活動として教育の問題が現れるのである。しかし、彼は現代社会における優秀性の追求を考察するに際しては、一部の個々人の才能と能力の開発のみではなく、社会のすべての分野におけるすべての個人の才能と能力の開発が必要であることを強調する。才能と能力の開発の問題は直接的には教育により行われるから、彼はこのような課題を提示した後に教育の諸問題に考察をすすめてゆく。教育は青少年の適切な仕方

による選別，および育成のための主要な手段として彼においては把握される。この意味での教育を行うに際しての諸条件，すなわち知能を判別する手段としらてのテストの問題，才能に関する一般的原則，高等教育の問題，動機づけの問題，等々に関する考察を彼は述べているのであるが，これについての論議は部分的でしかないから，ここではむしろ彼の思想全般の基調となっている理念すなわち上記の第二の側面を先ず考察し，これとの関連において彼の教育論の特徴を指摘するにとどめたい。

「優秀性」の概念が多様なものであることを論じた箇所では，ガードナーは次のように言っている。「われわれが略述した優秀性という広い概念は二つの礎石の上に建てられなければならない…… 1. 諸々の価値に対する多元的なアプローチ…… 2. 普遍的に承認された個人の〔自己〕実現の哲学……。⁽²⁶⁾」ここで指摘されている第一のもの，すなわち「価値観における多元主義」は個人の自己実現の理念から必然的に派生することである。個人の自己実現の理念こそがすべての優秀性の概念に関する彼の考察の基礎をなすとみることができる。事実，この理念は彼の教育論全体の基礎をなすものでもあり，より一般的にいて彼の社会哲学全体を貫く基盤のひとつでもあることはさきに引いた「自由の衣はぬい目なしである」の句からも明らかである。

個人の自己実現という理念は少しく仔細に検討するならば，人間の思想の歴史において普く見出されるものであることはいうまでもない。ガードナーの場合この理念は人間の尊厳の意識に基づくアメリカ社会の思想的伝統のうちに自明のものとして理解されている。「われわれ自身の社会においては，人は優秀性の理念に奉仕し得る，かつ奉仕すべき偉大な力に満ちた観念を深く探し求める必要はない。それは個人の実現というわれわれの心の底に深く根を下している理想である。この理想は個人の価値についてのわれわれの確信のうちに内在しているのである。それはまた機会の均等へのわれわれの信念を補強しているものである⁽²⁷⁾。」この理念の形式的な表現は彼の次の言葉において見出すことができよう。「われわれが達成し

なければならないものは、不断の自己発見、人の最善の自己を実現するため、ないし人がそれになりうる人格 *the person one could be* となるための不断の再形成の概念である⁽²⁹⁾。」彼は多くの個所でこの理念に言及しているのであるが、彼のこの理念に関する考察のうち基本的なものは以下の諸点であろう。

先ず第一に、この理念は個人の諸活動に活力を与えるもの、したがって個人の諸活動のいわば原動力となるものである。第二に、内容的に見て、個人の自己実現は単に知的発展にのみ限定されるのではなく、情緒的、道徳的な発展をも含む。むしろ優れた意味において道徳的な面での発展を求めるのである。ここには反価値的なものをしりぞけ、正の価値に向って自己を実現することが強調されている。「われわれは自己実現を進めることを望んでいるが、それは最善の姿における人間を特徴づける理性的および道徳的努力の枠組のうちにおいてである⁽²⁹⁾。」この意味において、自己実現の理念は、何らかの種類の道徳的な目的に対して共に献身する態度（具体的には偉大な社会の建設）を促進するものとして理解されている。第三に、より一層具体的に規定した場合、この理念は「多元的な価値」を内容として含んでいる。この理念は各々の個人がそれぞれに独自の価値観にもとづき、己れがよしとする価値を志向して優秀性を展開することを促す。それと同時に他面において、各人が各々独自の価値を実現している限りにおいて互いに平等なものとして共に立つという思想もこの理念によって基礎づけられるといえよう。彼はいう。「われわれは、あらゆる段階の能力、社会がよしとするあらゆる活動に通用しうる優秀性の概念を育てなければならない⁽³⁰⁾。」この意味において優秀性には無数の種類および度合いが存在し、それらはすべて価値において平等なのである。高等教育の問題に関連して述べた次のような言葉はこの点に関連し興味深いものである。「大学に学生が殺倒している事実も、われわれの価値観の混乱に比べればさほど憂慮すべきことではない。人間の尊厳と価値は各人の到達可能な範囲における精神の資質との関連においてのみ評価されねばならない⁽³¹⁾。」同様

の意味において彼は「優秀な水道工事人は無能な哲学者よりもはるかに尊敬に値する。」ともいっている。「優秀性と平等の調和」の可能性に対する彼の答えはこの点において与えられているとみることができよう。その答えは要言すれば、価値観の変革を必要とするということであろう。そしてさらに掘り下げて検討するならば、平等という概念の問題に帰着することとなるように思われる。このような個人の自己実現の理念を念頭において、いわば可能態における優秀性を現実態にもたらしものとしての教育の問題に関するガードナーの考察を検討するならば、その二三の特徴的な点は以下のごときものである。まず個人の才能を識別することの重要性を説くが、この点に関しては標準テストの意義を高く評価しつつも、このようなテストによっては評価し得ないいわゆるノン・アカデミックな資質（価値観、態度、理想等）の才能において占める意義を彼は強調している。他面において人間の業績達成における動機づけの重要性を彼は強調する。教育制度との関連においては、コナントの提唱するいわゆる総合高等学校の制度を高く評価している。とくに高等教育機関については、明確な目的もなく大学に進学する傾向を批判し、大学以外にも適切な教育の道のあることに人々の注意を喚起しているが、この点に関連しては両親、教師その他教育関係者のカウンセリングの重要性を強調しているのが印象的である。これと同時に、高等教育の問題に関しては、アメリカ社会に一般的な「大学に進学することが意味ある生活への唯一のパスポートである」とする考え方を誤った価値観として戒め、大学以外にも進むべき路の多々あることを彼が説くとき、われわれが注意しなければならない点は、彼がけっして「知的エリート」による社会の指導を提唱しているのでもなく、また高等教育機関への進学者を単純に制限せよ、とすすめているのでもないということである。二三の箇所では彼は知的エリートによる社会の支配を描いたマイケル・ヤングの『能力主義の興起』*The Rise of Meritocracy* (1950) の立場を厳しく批判している。また大学への進学率については『アメリカの目標』(1960年)の第3章で彼自身(多数の教育界の指導者の意見を徴した

上でではあるが), 中等教育以後の教育機関 post-high school institutions に学ぶ学生数は 1970 年には同一年令層の 50% であるべきである, と提案していることをわれわれは念頭におくべきであろう。

教育の問題についての一層包括的かつ具体的なプランについての彼の見解は、『アメリカの目標』の第 3 章から看取できるであろうが, 多岐に亘るのでここでは立ち入らない。ただ, 教育問題一般を論ずる場合に彼の論議, 提案等の基調となっている原理が, 各人に可能な限り平等な機会を保証しつつ, 各人をしてそれぞれに独自の優秀性を発揮させることを配慮していること, およびそれらの配慮を通じて社会の一層の発展を計ることを求めていることであることを見落すことはできない。

VI 結 び

以上の考察から見出されるガードナーの思想の特徴的な論点は以下のようなものである。1) 社会における個人の業績にもとづく競争主義および平等主義を緊張関係において共に保持することを通じて社会の沈滞を防止し, 活気を維持することを求める社会哲学。2) 個人の自己実現の理念を可能性の根拠として一方では各々の個人の優秀性を完全に発揮させることを求めつつ, 他方において多様な優秀性の概念を基盤として各個人間の価値の平等の実現を説いていること。3) このような点を配慮して教育の諸問題を考察していること。および, 4) 以上のことにもとづき, 自由な社会, とくに「偉大な社会」という具体的な目標をかかげもって, 社会そのものの発展を求めるべきことを提唱していること。

彼自身が取り組み, またわれわれも問題として来た社会における「平等と優秀性との調和」の可能性に関して言うならば, 彼自身明確な答を提示してはいないが, 彼の言わんと欲する所は上記の考察から明らかであろう。それは個人の自己実現および多元的な価値の間の平等という観念において可能であると理解される。しかし彼自身においては, 平等と優秀はともに可能でなければならないということがいわば公理として最初から前提され

ていたというべきであろう。『優秀性』の主題は「より限定して言って、われわれの社会と同じような社会において優秀性が可能となる条件についてである。」と彼自身が述べていることはこのような事情を明確にも語っている。また平等と優秀をともに可能な理念として前提している限りにおいては、彼にとってこの二つの理念は実現されなければならない課題として把握されていたのである。優秀と平等とをともに実現されなければならない理念としてかかげ、それを可能とするための条件を解明した点において、彼の思想は大きな意義をもつものといえよう。

さきにもふれた通り、優秀と平等が可能であるとされる場合、問題はより根源的な次元にさかのぼって、とくに平等の概念をどのように把握するかの問題、すなわち平等の定義の問題が現れる。そしてこの問題は直ちに社会における正義の概念に関連して来るのである。ガードナーが価値観における混乱に言及したのはこのような文脈において意味のあることである。正義論のこの側面については、アリストテレスが、正義（より正確に言えば、部分的正義）を幾何学的比例（ $a : b = c : d$ ）にもとづく配分的正義と算術的比例（ $a - b = c - d$ ）にもとづく整正的（または匡正的）正義に分けたことは周知のことである⁽³²⁾。前者は実質上の差異とそれを生み出す母体となったものとの比を均等とするものであり、後者は比較される二つものをいわば足して二で割り、多い方の過多の部分を少い方に移すことによって均等性を得るものである。多数の個人からなる現実社会の場合においてこのような正義の概念を適用することは事実上不可能であるが、正義の概念についての二つの類型としてガードナーの思想に適用してみるならば、ここには二つの正義の概念が共在しているといえることができる。すなわち、個人の業績の意義を是認しようとする限りでは、配分的正義の意義が認められており、個々人の平等が説かれる限りでは、整正的正義の意義も認められているのである。彼の思想においては、この場合もまたそれらは統合されるべき課題（その場合は配分的正義を整正的正義に近づけることとなるであろう）として理解されているように思われるが、適切な見解とい

うことができよう。各人が各々独自の価値を志向して活動している限りにおいて、あるいは各人がすべてを超えて存在する超越者との交わりに立つ限りにおいては、各人はみな等しく尊厳と価値をもって理解されなければならないのである。

ガードナーの思想は直接的には1950年後期におけるアメリカの社会が迎えた工業化社会のもうひとつの新しい社会状況における諸問題と取り組んだものであることは明らかである。思想史的にみた場合、彼の思想の意義は今世紀前半に支配的であった「進歩主義」の理念を検討して、進歩主義が見落した理念すなわち個人主義、多元主義等の正当な意義を再認識し、もって社会そのものの活力を回復しようとしているように思われる。しかしこのことは、平等主義を廃棄し、社会的ダーウィン主義のかかげたような情容赦のない競争主義に戻るということでは断じてない。むしろクレミンの言う所の進歩主義のヴィジョンの新しい時期と次元における再公式化ということが妥当であろう。幾多の側面において、彼の思想は驚くべく総合的である。概念規定において欠けるところ少なしとはしないし、また、個人、社会、ことに国家を超えた超越的存在ないし価値の次元との関連の考察も充分とは言えない。しかしこのような歴史的状況による制約および理論的な制約をもつにもかかわらず、極めて総合的な彼の思想は現代の工業化された社会に対して多くのことを教えるのである。この意味において彼の思想は高く評価されるべきであろう。(本学助教授)

註 Gardner, John W. のテキストとしては、*Excellence. Can We be Equal and Excellent too.* New York, 1961 (Harper Colophon edition, 1962), および *Self-Renewal. The Individual and the Innovative Society.* New York, 1963. を用いた。以下前者は『優秀性』、後者は『自己更新』と略記し引用する。

- (1) Hegel, G. W. F. *Die Vernunft in der Geschichte*, hgg. von J. Hoffmeister. Hamburg, 1955⁵. 63頁。
- (2) Ulich, Robert. *The Human Career.* New York, 1955. 第2章第1節。
- (3) 同上, 56頁。
- (4) Dewey, John. *Democracy and Education*, New York, 1954²⁷. 第1章第1節。

- (5) Dworkin, M. S. (ed.) *Dewey on Education*, New York. 1959. 30頁。
- (6) J. W. ガードナーの略歴については、主として『優秀性』、『自己更新』の巻末の著者紹介、雑誌 TIME, 1967年1月20日号, 同, 1968年2月2日号によった。
- (7) 『優秀性』, xi 頁。
- (8) Cremin, Lawrence A. *The Transformation of the School. Progressivism in American Education 1876—1957*. New York. 1961. 以下クレミン, 『学校の変容』と略記する。
- (9) クレミン, 『学校の変容』 viii 頁。
- (10) 同上。348—351頁。
- (11) 同上。353頁。
- (12) 同上。328頁。
- (13) 『優秀性』。xi 頁。
- (14) 同上。28頁。
- (15) 同上。34—5頁。
- (16) 同上。145—6頁。
- (17) 同上。155—6頁。
- (18) 『自己更新』。118頁。
- (19) 『優秀性』。161頁。
- (20) 同上。101—2頁。
- (21) 『自己更新』。102頁。
- (22) 『優秀性』。11頁。
- (23) 同上。19頁。
- (24) 同上。14頁。
- (25) 同上。33頁。
- (26) 同上。134頁。
- (27) 同上。135頁。
- (28) 同上。136頁。
- (29) 同上。136頁。
- (30) 同上。131頁。
- (31) 同上。81頁。
- (32) アリストテレス『ニコマコス倫理学』第5巻。訳語は高田三郎氏(河出書房版, 昭和30年)による。

The Social and Educational Thought of J. W. Gardner

Kazuie Sanuki

Education as a social function aims at the survival and enhancement of life of a group concerned. In this sense education is an activity of the realization of the ideals and values which the society concerned fosters.

Education in a democratic society is confronted with a difficult problem of harmonizing the pursuit of excellence and the realization of equality in the society. The article discusses this problem through the analysis and examination of the social and educational thought of J. W. Gardner primarily expressed in his *Excellence* (1961).

Gardner's arguments are examined in terms of: 1) his view on three contesting principles of society, that is, i) hereditary privilege, ii) competitive performance, iii) equalitarianism, 2) his view on the demand of the development of the talents in society which has been necessitated by the present-day situation of industrialized society, 3) his view on the pursuit of excellence on the basis of the idea of self-fulfilment, and 4) his appeal to the ideal of establishing a great society.

Gardner's thought, on the one hand, seems to be influenced by the social and educational situation of American society in 1950's. However, on the other hand, it has universal significance to the present-day industrialized society in terms of the attainment of both equality and excellence.